

武家名目抄稿

刀劔部

八

和書門類	二五二〇六	九十七	四五六
函號	二〇六	九十七	四五六
架	二〇六	九十七	四五六
冊	二〇六	九十七	四五六

內閣文庫	和書類	二五二〇六	四五六
函號	二〇六	四五六	一三架
架	二〇六	四五六	一三架
冊	二〇六	四五六	一三架

內閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (347)
函號	153 275



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





武家名目抄稿第八冊

刀劔部八目録

金銀装束太刀

刺鑊太刀

畫飾太刀

金作太刀
己下三
名一劔

金太刀

金劔



銀造太刀 以下
名一 五
劔

白作太刀

白太刀

銀劔

銀太刀 金鶴丸磨

皆銀太刀 己下
名一 二
劔

皆白劔

金銅作太刀

赤銅作太刀

銅黒作太刀

黒作太刀

武家名目抄稿第八冊

刀劔部八

金銀裝束太刀

衣服令云衛府督佐並皂羅頭中位襖金銀

裝腰帶金銀裝橫刀

建武年間記云武者所輩可存知條々一金

銀裝束太刀刀鞍細々不可用一唐皮尻鞞

一切付等同斷

刻鏤太刀

延喜彈正式云九刻鏤太刀非新作聽五位

已上着川

畫飾太刀

日本後紀云弘仁元年九月乙公卿奏言謹

案略去大同二年八月十九日下彈正臺例

云雜石冑帶畫飾太刀及素木鞍橋獨射行

葦鹿獺羆皮等一切禁斷者臣等商量雜石

易得造賣多人至于着川亦復難損銅鍔具

者以漆塗成動易剝落今難易各異價直是

同為弊一也又毛皮之類不聽犯用鞍具之

要唯須敎文是以无賴之徒竊斃牛馬為弊

二也又節會之後蕃客之朝歲時不絕必須

飾刀今惣被斷恐損國威伏望雜石及毛皮

等悉聽用之畫飾刀者除節會蕃客之外將

如禁制鞍橋者除桑棗之外不論素漆隨心

通用隨庶民便蒙得其所並許之

樓畫飾刀とははるくくいりへさき

くろとあせくち刀のこもをり後飾紋

とひく一様の若刀とさきさき

あゝん

金作太刀己下三
名一劔

延喜左近衛式云大儀大將金装横刀中將

金装横刀少將金装横刀將監將曹竝横刀

府生近衛並横刀

又左衛門式云大儀督佐金装横刀尉志並

横刀府生門部並衛士横刀

又水工式云供神料金装太刀一口長二尺
三寸廣

一寸料鐵四竹金薄六枚長功二十三人工

五人夫中功二十六人工夫六十八人短功二十

八人工夫六十二人

物具装束抄云金作細劔大臣之外不用之

名目抄云金作太刀大臣已上着之銀作納
言已下用之

平治御唐云

四表條

あゝきんころの

よりきやハきんせ七あつちれ

あきひしきしむらきさこのころ

ひみきしきしきふしきしきし

あまのそくちりあさころの

くちりあまきんころのくまのあけ

しふりぬり

平家御唐云

河原軍

ころの其の装

あまはあつちのしきれしれよむら

あますこのころひきてころころ

あまのころしきころのころ

あけ

又云
いこれ

あかころのころ

あまのころあまのころあまのころ

つゝとともと子よきあひくくあや
ふれさ志の陣加のあや

又云 新野征夷の軍宣旨条 康定色代仕と名簿

て可系はへとも云備佐のくく向くはし

は宝作の太刀を拵ぐる征矢一腰終て

いき

又云 十部系人付家紋付条 十郎義人を宝作の太刀

左より拵まつるつを後生菩提のくく

て熊野山へ福経を奉らせ入り右より

云々多す乃大右刀ぬき長ちくぬくこあは

に左ちむのひ多

源平威衰記云 綏之経院 赤地錦ノ直垂ニ萌

黄ノ唐綾ヲ畳テ坐紅ニ威夕凡鏡キテ鉄

形ノ甲下人ニ持セテ後ニアリ金作ハ太

刀帯夕凡ハ

又云 高細渡守治川条 木曾力從兄弟ニ信濃国住

人長瀬判官代義貞ト名乗テ菟出タリ赤
地錦直垂ニ黒糸威ノ曹ヒ鍬形ノ甲ニ白
駿馬ニ白伏輪ノ鞍置テソ乗タリケル金
造ハ太刀ヲ拔テ向イケルニ畠山ハ是ソ
宇治路ノ大将ナル覽トミテ云々
又云多田ノ行綱ヲ招テサマ々酒ヲ勸
テ金造ノ太刀一振引出物ニ玉フ
又云成親謀新大納言成親卿ノ兵具ヲ調

ヘ軍兵ヲアツメラレサルヘキ者共相語
ヒ此營ノ外他事ナカリケル中ニ多田ノ
行綱ヲ招テサマ々酒ヲ勸テ金造ノ太
刀一振引出物ニ玉フ
義経記云舎那王承安二年二月二日乃
朝而此略中紺地ヲ系きよくつ系きや包ふ
有る事勿言作の太刀をいそ
又云是是次、完期の軍をよとく

室作乃方力の二入七寸五分五分のひり
きくちのひりふりふりふりふりふりふり

り事理

吾妻鏡云文治二年三月五日癸巳伊豫前司義経横行

所々今日太神宮稱為所願成就奉金作劔

此太刀度々合戦之間所令帶之也云

又云建久四年九月十一日永福寺薬師堂供養也略中

加布施衣一領水精念珠金作劔一腰

又云正治元年九月廿三日壬子中将家入御和田左衛

茅依召奉送神馬鹿毛駿秘藏御馬被置白鞍於諏方上

宮下宮御分御劔金作文亀甲云々

世俗淺深秘抄云金造劔尋常不用之宿老

人用之

太平記云上国東大勢長崎悪四郎左衛門尉

八別々侍大将ヲ兼テ大手へ向ヒケル略中

續續ノ鎧直垂ニ精好ノ大口ヲ張セ紫下

濃ノ鎧ニ白星ノ五枚甲ニ八龍ヲ金ニテ
打テ著タルヲ猪頭ニ著成シ銀ノ磨著ノ
、當ニ金作ノ太刀ニ振帶テ云々
又云正成天王寺末心ヲ明ニ勤ルニ天下
ノ反覆又シカテシト憑敷覺ヘケレハ金
作ノ太刀一振此老人ニ与ヘテ書ヲハ本
ノ秘府ニ納サセケリ
應仁記云御聖合中ニモ哀ト覺シハ十三
戰條

四許ノ小兒ノウズケセウニカ子黒ナル
カ花ヤカナル具足ニ袴ノソハ高クアケ
金作ノ小太刀拔テ軍兵氏ノ先ニ進ニ政
長ノ御方ニ志アラレ人出合玉ヘ打物ニ
テミセ申サント各乗カケ出ル所ヲ藪ノ
中ヨリ射矢ニ胸板ヲ射通サレ伏タリケ
レハ云々
應仁別記云爰ニ目付ニ骨皮左衛門道源

トテ多賀豊後守所司代ノ時走舞タニカ
手ノ者共京中山城脇ニ多カリケリ申子
細有十レハ勝元吳股吳服ノ織物金作ハ
太刀十レ給ケレハ
應仁私記云若武者連好系具足金作太刀
額當頬當脇當腰當小泉甲緒ヲトメ喉輪
四手鏝刻小幡重藤弓略中思ノ出立輕ニ
命

矣鳴子紙云云大羽と物折き人のすゝむ
て出さる也略中二尺七寸レこレ子レ法レる
此レ也レ也レとレ有レるレもレむレんレとレさ
け

長享元年江別沙動坐陣負矢到死云
常徳院殿様所藏也
袷略中也腰物藥研及口脣吉光也并金作の
沙レ太レ刀レ也

武將死に預るに其の流するもの
たの古に好くもその今は好くも
の事なる不及び大せつとふまの
返も金とつづらひを帯りし不
ケ始の事ハ人御ふもその事
くすすすすすすすすすすすす

按和名抄浪装と之強如蘇都久利と讀
たれを金装金造金作と之に古如蘇

都久利と讀へし略してはさうと
もその也凡法書よくもはつと
とつへる大いこと家うんを細叙と
家まは物叙とさうりつと
あちめハ引去の文さうりつと
る今一とよ并さくつと

金太刀
金劔

欽元日記云白武庫敵尾表亦九東の方古法
太刀恒被遣一舊冬一法還礼也狩村宰
相方古沙右刀金馬栗

義教公御元服記云義雅着淺黄糸鎧帶金
刀金太刀握重藤弓

建内記云嘉吉元年三月廿六日室町殿令
参伊勢兩宮給日也云々廿九日丙寅今日

御馬副文多種也雜色也來演、参宮之儀云略中兩宮

御進物金劔一腰兼被付御師云々令持

銀造太刀以下六名一劔

扶桑略記云寛平六年九月五日對馬嶋司

言新羅賊徒船四十五艘到着之由太宰府

同九日進上飛取使同十七日記曰略中所取

雜物大將軍縫物甲冑貫革袴銀作太刀纏

弓革胡蘇克夾保呂各一具已上附脚力多

未常進

天滿宮託宣記云天曆元年丁三月十二日
酉時近江国比良宮天仁祢宜神良種加男太
郎九年七歲面那童仁託天宣久我一可云事
有リ良種等聞ク我加像チ加ヲタ作ソルル効ハ
我加昔持シ有リ其ヲ令取ト仰セ給フ良
種等申久何處加候止良年答仰給久我物具
ハト此仁来住比始皆納置リ佛舍利玉帶
銀造ハ太刀尺鏡ト有云ク

吾妻鏡云文治四年正月六日壬寅上総介
義兼献院飯相副馬五足二品出御南面總
州自持參銀作劔

百練抄云嘉禎三年正月廿六日皇后宮推
大夫実持卿取銀作劔授左少將資俊朝臣
按和名抄銀装之路加祢都久利と謹た
是は銀造銀作也志謹んとりも更在
り志る也此太刀白太刀又志謹之銀劔

た〜も〜り〜る

白作太刀

年家ゆづの せいしやうん の糸 つきのり又玄街
のすけれちちく せうもよき せうもよき
のそらまき しん ちん しん ちん しん ちん
たちり しん ちん しん ちん しん ちん
〜馬 しん ちん しん ちん しん ちん
ちり

白作の太刀と書くる也あ〜そ此名目
と存〜く交ふ〜しちんは目錄とや交ふ
白太刀の如く稱す。但有く、

白太刀

梅松論云 古稱し 後陣は箱塔のさうて者し
に當社乃 祠友為 堂概〜奉る 事限りあし
内を帯け 民を 合戦の 龍探の 字 俾よ者し
と云 陸新水 云々 且 廟の 氣 云々 八幡宮 云々

孫しなり終るる長生のまじりし四日
後の白き御教書に記す

鶴岡八幡宮社務職次第云顯辨元亨二年
壬戌十月廿八補社務職四五十御教書御使長

崎次郎左衛門尉被送引出物砂金五十白

太刀一馬足置白鞍

太平記云神南合右衛門佐八流へ打帰ラ

此軍ニ討レソル者共ノ名字ヲ一々ニ書

注メ因幡ノ岩常谷ノ道場へ送り亡卒ノ

後世菩提ヲソ弔ハセラレケル中ニ毛河

村彈正忠ハ我命ニ代テ討レソル者ナレ

ハトテ懸タル首ヲ敵ニ乞受テ聖一人請

シ寄テ今マテ秘藏メ被乗タル白尾毛ノ

馬白鞍置テ葬馬ニ引セ白太刀一振聖ニ

与テ討死セケル河村カ後生菩提ヲ問レ

ケル情ノ程コソ難有ケレ

又云中殿河小串次郎左衛門尉註行地緇

ノ直垂ニ銀薄ニテ二雁ヲ挫白太刀ヲ佩

ク

又云公家武家都ニハ佐々木佐渡判官

入道道譽ヲ始メ在京ノ大名衆ヲ結テ茶

ノ會ヲ始メ日々寄合活計ヲ盡ス略中五番

ノ頭人ハ只今為立夕ル鐘一縮ニ數掛夕

ル白太刀柄鞘皆金ニテ打クニ夕ル刀

ニ虎ノ皮ノ火打袋ヲサケ一様ニ是ヲ引

相国寺供養記云路次行列先陣隨矢一番

武田伊豆守源信在黒糸鎧地紅直垂文縫

遠菱白太刀梅花皮刀馬鶴毛蒔繪鞍金履輪金

具上帶不引贅熊皮

花營三代記云應永卅二年己丑正月二日御

方官領成乘車裏松義資卿同車御劔假直

垂也略中白太刀官領直進上御鎧白彈正少

彌持參

諸大名流儀成中入紀云式之献系帝亭之
ハ流登於下時白太刀成進上亭之必於系
たり

宗五大雙紙云大々々々事一々々々々
れりしは如く如く此白きを腰よりよみぬ
をさきくくきかきくくえんをさる
也中きい右口は白太刀とく柄鞘共り

白くはる銀のうさきあいのあきなりを
けり

三光院内府記云常可令持太刀哉否之事
本式之時ハ布衣ノ侍平鞘之三平菊一文
字之名作也平鞘注白太刀各作也菅蒲草
帯取也西向礼

儀可
用也

佐井宗之圖書云所の附る太刀法
之の早矢一あき事肝要す成なり

の矢をさうくすのきさうくすもはくひふふ
て縁をさけひとさくそかふ人射ひハ一より
まじりとも縁を事ありてのりくまハ
白太刀をさけひ也白の刀もあつて縁
みく作らるる太刀也と云く

義満公御元服記云廿二日御評定始略中勅

使忠光卿

後日白太刀鞍馬
以御使被送之

義教公御元服記云仙洞ヨリ御太刀白

貞順記云右ニ御太刀一腰白御弓征矢

康富記云宝徳二年室町殿着直垂御参内

伊勢備中守貞親

直垂白太刀非薄
直垂也

室町記云正月二日略中白太刀管領直ニ進

上御鎧白

義輝公御元服記云摂津掃部頭為父摂津
守元造朝

代臣持参御進物御太刀白

三好亭御成記云三ツ目ノ御盃義長頂戴

之仍而御太刀白進上
夫用之日記云條の役入ニハ
也少右刀ハ白左刀右るるし
嘉良喜隨筆云黒漆太刀ト云刀常ノ太刀
目錄ノ太刀ナリ白太刀ト云ハ太刀ハナ
ク代ハカリヲ献スルヲ云カ禁裡ニハナ
キ名目也公方家ノ記録ニ白太刀ノニハ
馬ハ真ノ馬ナリニヨリ毛ツケアリ太刀

ハ代ニテ上ルハ朔ニ公方ヨリ禁中へ上
ルカ白太刀ナリワレハ太刀ハナクテ鳥
目千足太刀代ナリ馬ハ真ノ馬上ル

銀劔

古事談云寛治五年八月十四日美家朝臣
許ニ有山鳩居於渡殿欄上美家成恐略中仍
以銀劔一腰駿馬一疋十五日曉使助道惟
貞奉八幡云々

源平感衰記云太神宮十郎藏人ハ所々ノ

軍ニ負テ参河ノ国府ニ息突居テ是ヨリ

伊勢太神宮へ祭文ヲ進ル此ノ祭文ニ神

馬三疋銀劔一振上矢二筋相具シテ太神

宮へ奉進ス

吾妻鏡云文正四年六月六日上總介兼兼猷焼飯相

副馬五疋二品出御南面総別自持参銀作

劔御酒宴宸中有御的始

後愚昧記云應安二年正月一日後聞去夜

追儺之次小除日不被行之武家典厩征夷

将軍事被宣下之上卿雄中納言実件宣旨

今夜官務左大史兼治持向典厩宅了銀劔

一柄砂金百兩与兼治云々

銀太刀金鶴丸磨

浦すり夏秋の足正れ巻云正中乞手とりみ孫

生れ世のありいけり水の社に祈奉るま

上と遊部及上人のいづききふらとせ
了別商友多未督すけあきららとせ
へとやいしもの八人ふとせあひの
へとやいとせのふりたのたときとせ
たるとせのふりたのたときとせ

皆銀太刀 各一丁 二

百練抄云建久二年十二月十七日辛卯今
日法皇召中原廣元親能等各給銀劔

吾妻鏡云嘉禎三年十二月二日己卯明日
蝕御勤行僧三人今日被召御所各賜銀劔
一腰伊勢守定貞奉行之

太平記云 自伊勢進 寶劔條 圓成ヲ同道シ京ニ上

テ日野前大納言資明卿ニ属テ宝劔ト祭
主力起請トヲソ出タリケル資明卿事ノ
様ヲ能々聞給テ誠ニ不思議ノ神託也但
加様ノ事ニハ何ニモ横句謀計有テ傳奏

ノ短才人ノ嘲哂トナレテ多クハ能マ
事ヲ実否ヲ尋聞テ諸卿クニモト信ヲ取
程ノ事アラハ可奏聞何様天下静謐ノ奇
瑞ナレハ引出物セヨトテ銀劔三振被物
十重四成ニ夕ヒテ宝劔ヲハ前裁ニ崇メ
給ヘル春日ノ神殿ニソ納メラレケル
建武式目並加之檢約條ノ一月祝亭引出
物事止事也
甲冑右刀刀始布也
刀刀令浪類唐物也
可用銀劔以下

輕也

又云徳心入院禁制條ノ貞治七二
十三沙條一入院ニ時礼
儀也白襪以下銀劔一腰小袖一重杉原一束羽
衣家法礼年身引人引也一白可傳止之
薩戒記云應永卅年十二月十二日今日征
夷大將軍右近中將義量参内并参院十三
日為賀昨日参内院参禪門并柳宮献銀劔
退出

花營三代記云應永卅一年甲正月七日申
院飯出仕赤松左京大夫滿祐自御方御所
様参り御方依御違例無御對面御盃給御
酌刑部少輔持房赤松銀劔進上銀劔被下
滿濟准后記云正長二年三月九日自御所
被尋仰事今夜御元服之後内裏へ沙金百
兩御馬一疋被置御鞍鞞御劔銀一腰可被
進上也云々

又云同辛八月十七日今日室町殿様八幡
御参詣略中御神宝如例金二卷兩銀劔五腰
神馬一疋御神樂料二千疋也

關東兵亂記云持氏鑰倉へ永享十年十一

月一日長尾尾張守入道芳傳鑰倉警固ノ
夕ノニ夕陪ヲ立テ責上ル是マテ参ル事
別ノ義ニアラス諤臣憲直直兼カ申所ヲ
御承引候テユヘナク憲実ヲセサレトノ

御企ステニアラハレサセ玉ハハ身ノ不
誤処ヲ申開謬者ノ張本ヲ給テ後人ノ惡
習ヲコラサレカ為ニテ候トテ猶ヲフセ
テ畏ル依テ憲実申請ルニ任セ憲直直兼
眾科ニ可被処トヲ被仰出ケル芳傳喜悅
ノ眉ヲ用テ則裝束ヲ替テ遂出仕銀劔一
振進上ス

建内記云嘉吉元年四月十三日己卯左衛

門督實雅以滋野井中將實勝朝臣示送云

近年就御慶賀每度自禁裡銀劔被送室町

殿候事去けく加様ニ、
ぬ〜とも不候と

思食候先ニも細々ニ候ハぬ事トテ候者

為御冥加不可然可被申止持欽勝定院殿御

時後小松院稱光院左トの御時代ニも細

細候ける哉鹿苑天端院殿御時之儀ハ猶も覺

遠候先此近例如何奉見存哉面々誰々

も可尋申由只今室町殿仰候者予答云其
時分之後不申次之間不存知之但年始御
賀之時自禁裡仙洞毎年御馬御太刀之事
也其外細々之後ハ不兼及御披露者中将
云年始事勿論也細々ニ者更無其候候由
左衛門督も申入候けりと申候當御代之
様之朝敵御退治と珍重事との其比
不候ける故候哉被申云々長得院殿御元

服之時ハ被進云々鹿苑院殿御産方と乃
時ハいゝ候けるいゝも所見候へき
又明德内野合戦應永境合戦等之時如何
者予云鹿苑院殿御時之後誠不定勝定院
殿御時長得院殿御元服等之時忽論故者
今度就大覚寺義昭門主御事先日己自禁裏被
進御太刀了就京着之後今日又被進之間
此事及近例之御尋由羽林稱之次退散十

四日庚辰向左衛門督亭參御所云々謁中
將謝昨日來臨御劔間事述心緒了夫車馬
之類自上可賜下事也然者非不可有之後
或貴其物或賞其身恩賜也然者如朝敵退
治之時被感其功被恩下事尤可有之者哉
但注進之時 = 出御劔賊首京着之時又被
出之有剩事叙或北野一万句或御參宮無
為等之時細々之後似輕尤可有御斟酌之

茶可然候趣也
射礼元云縁を於の時集上へ振銀叙を
下附を弓矢を拵皆をよめて皆をば皆ぬき
の下りぬるを集上へ右の御子立を
弓をばひちくくを拵て矢を腰より
あゆもよきくを此上より銀叙を於也
右の身をあふのきて銀叙乃是れありへ
入るる茶をしく上振を洋しめて退かす

御使被送之後日有沙禁裏進物事送被進之砂金百兩分兩

折本法銀太刀一腰皆銀鞍馬一疋皮鹿毛切付唐

進上同管領御使參能直持鞍馬一疋鞞被進奏執

西園寺前右府

皆白劔

吾妻鏡云寬元二年正月十六日將軍家以

御自筆御賀札被遣御馬号直山名御劔皆白

等於隆辨之壇所被法印自去八日參籠明

王院北斗堂初請

金銅作太刀

内宮長曆送官符云金銅作太刀二十柄々

櫻長六寸五分以鳥羽纏付以朱砂畫其上

鞘長二尺七寸黑漆平文粘緋帛纏付阿志

須惠以倭文纏付阿志須惠長三尺七寸廣

一寸二分着緋組緒長九尺廣二寸五分

赤銅作太刀

ハ徐ニシテ左右ノ手ヲ土ニツキテ犬居
ニ井テ雲透ニ殿上ノ方ヲ伺見テ親ノ家
貞アト云ハ子息ノ家長モツト打入
ルヘキ支度也

判友物産之経えんいせ付於糸

うきふちんいりきあきこれゆきやうの
まけあふ人まきまきせせんうふあゆ
ませ我身ハ同ゆるツんちの左いさ中うあ

まを人ま一やうふけうをあさちるか
ちんれきこれうをまのまき死
そ赤船作のうちまき

異存義珍記之鬼一法眼ニか海所ニちんか

いあまのれ其あゆまにをちんむかちん
れまきう黄繩目の後志まき赤船作れ大
ちりまき口ハまき守者るるさあはあ
うんけうのまきけい船まきせくさい

ちりきり

信太野子云浮鳥を席くけぬ其のとも
を一尺八寸れうち刀と十文字ユキナ
に三人八寸ひーちやくとひりのちか
いく

関東兵乱記云小弓義明先カケレテ
強勢ノ程ヲ汝等ニ知ラセシテマソ先
カケテ打テ出ツ其日ノ装束ニハ赤地ノ

錦ノヒタヒレニ桐ノスツカナ物ヲ打タ
ルカラアヤラトレノ鎧キテ素国行三尺
二寸ノ面影ト云太刀ニ尺七寸赤銅作ノ
重代ノ御太刀ニ振ハイテ法城寺ノ大長
刀ヲクキ短ニ取り云々

室所及おぼろし冷泉隆考大カにーと主剛
の士ちうまはもよきおやーれちうひのこ人
しとちうまはもよきおやーれちうひのこ人

有りふゑく〜口人八守の赤銅作り太刀
よき三尺五寸の白柄此太刀ひけりけり先みす
み給

銅黒作太刀

内宮長曆送官符云銅黒作太刀六柄袋

黒作太刀

大内義隆記云判官座敷ヲソント立黒革

威ノ腹巻ニツホ袖ヲエヒツケ黒頭ニ御

幣タテタル甲ヲ着ニ尺一寸候シ刀ヲ上

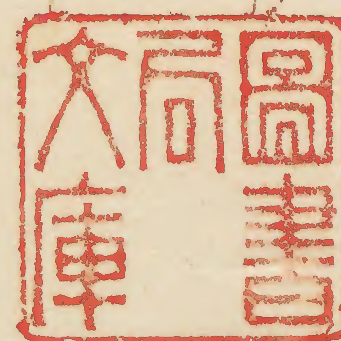
ニ横タヘテ三尺一寸黒作ノ太刀ヲハ

キ七所藤ノ弓ニ鳥毛巻ヲ取テ付云々

法家多々記云々所の所を黒太刀を了給

有り刀也さや巻とさ〜以事本紙あり

武家名目抄稿第八冊



淡書或曰休歸者人分

...

...

...

...

...

...

...

